（独立行政法人教員研修センター委嘱事業）

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報告書

プログラム名	Discover-Our-Town Project による合科型内容中心英語教育の実践的研修モデル開発～岩手県沿岸の被災地の高校において～（略称　CCBLT）
プログラムの特徴	1) 岩手県の被災地の高校を研修のフィールドとし、学習者に身に付けさせる能力とその方法について吟味・再考する機会としている 2) 英語教育の扱う内容に学習者の現実に直結する「災害」を取り上げ、学習者に意味のある学習とし、内容と接続した英語教材開発の力をつけることを目指す 3) 最新の英語教育指導法として注目されているCBLTの実施方法として合科型CBLTを提案する 4) 日本の児童生徒の課題とされる判断的思考・表現力を身に付けさせ、自信を高める指導方法を扱う 5) 異なる教科の教員が互いの知識・経験・実践力を学びあうことができる 6) 研究指定校において実践的に検証する 7) 上記の方法により、学術的な知見を教育の現場に活用する 8) 被災地というフィールドからの問題提起であるため、災害に備えるレジリアントな地域つくりに貢献する高校教育としての普遍性を見出すことが可能である 9) 大学のhuman resource として教員の他留学生・学生・国際交流先の教員も本プロジェクトの支援にあたり、新しい指導方法を学ぶことができる 10) 大学の国際連携を活かして、研修の成果を海外に広げる

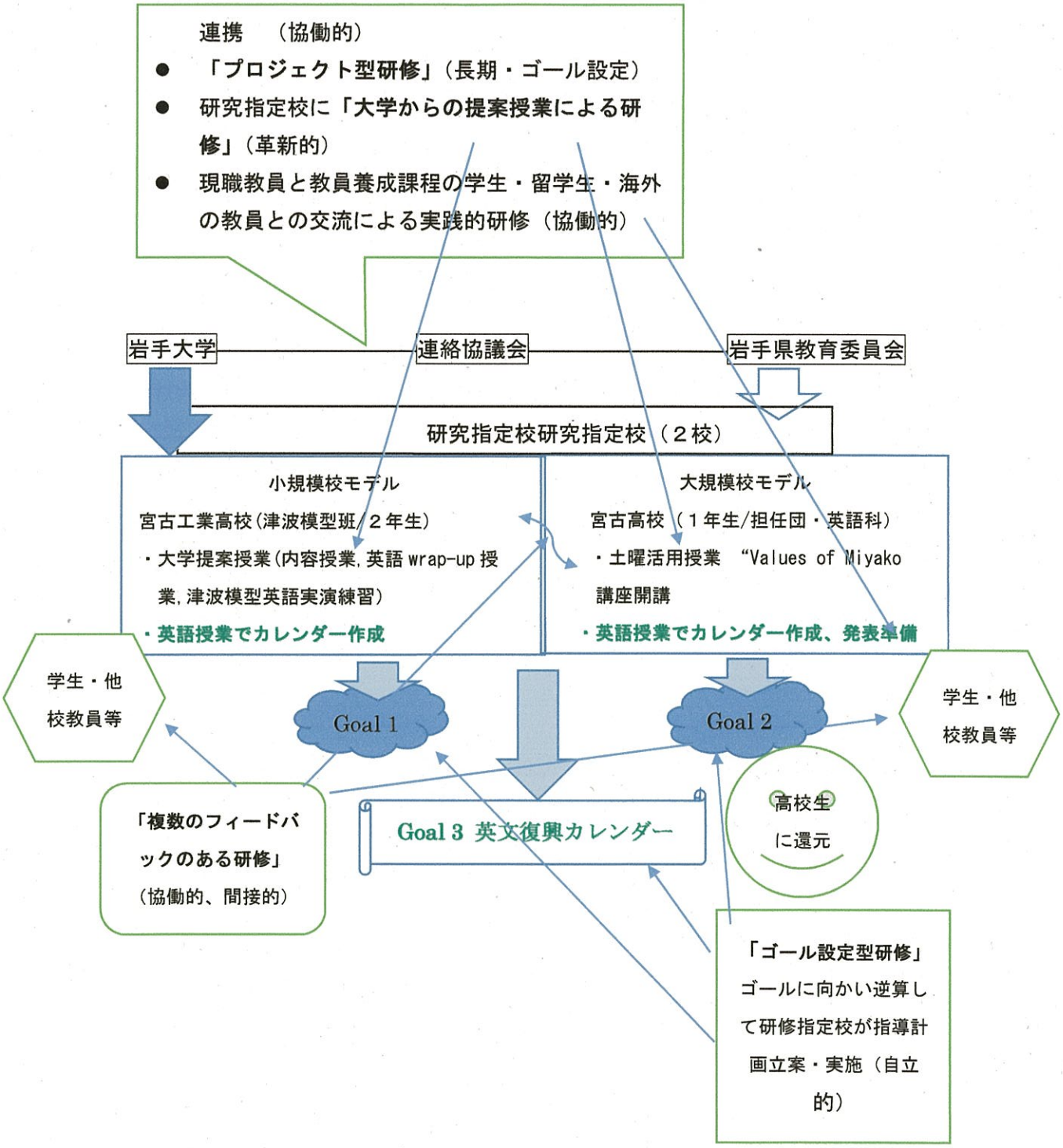
平成２８年３月

機関名　国立大学法人岩手大学　　連携先　岩手県教育委員会

プログラムの全体概要

※ 各教育委員会の研修実施の参考例となると思われる開発成果を

中心に、プログラムの全体概要をポンチ絵等でまとめてください。



Ⅰ　開発の目的・方法・組織

1　開発目的

東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県沿岸では、復興や防災において学校教育が大きな役割を果たすことが期待されている。震災を経験し復興の担い手となる子ども達には、新たな教育手法でその能力を開発する必要性と可能性がある。被災地で学ぶ高校生の確かな英語力育成に焦点をあて、新しい教授法として、内容中心英語教授法(CBLT) の応用形として「合科型 CBLT」を開発し、その実践力を養成することを目的とする。

内容には、被災地の高校生にとり極めて意味のある「災害」を取り上げる。学習者にとり意味があり興味関心をひくことは外国語の学習を促進すると言われている。この内容を英語教育の教材とする力、学習者が自己肯定感を持って表現することができるよう導く授業構成力と指導力を養成することも目的の一つである。

現代は知識基盤社会化やグローバル化が進行し、時代に即した「生きる力」が求められている。英語科教員には新たな知識・技術が必要である。その獲得のための方法として、本研修プログラムでは、地域・海外の人材・専門家と連携の機会を設ける。学習者にとり意味ある内容を把握し授業を展開する力、内容授業を wrap-up する英語力、英語教材作成力、地域の人材や海外との交流をコーディネートする力等々多種の指導力の開発と向上を図る研修モデルの開発を目指す。

2　開発の方法

○研究指定校を設定した「災害」をテーマとする実践的研修の実施：東日本大震災の津波被災地である岩手県宮古市に在る県立高校２校、宮古工業高校と宮古高校（普通科）を研究指定校として、「災害」をテーマとした合科型内容中心英語授業を提案し実践的研修を行い、他校の教員が参観することにより研鑽を積むことができるようにした。

○全体研修会の開催：事業の最初に全体研修会を開催し、事業の趣旨・背景・目的の研究指定校及び沿岸部の学校関係者への説明及びコミュニケーションを目指す英語教育のワークショップを開催し、本事業への理解を得、研修成果が広がることを目指した。

○新しい授業構成の提案と実施：内容授業を市民や専門家をゲストスピーカーとする授業、英語でのラップアップ授業を構想・実施した。

○具体的作品をゴールとして設定：両校に地域をテーマとした学習の成果物として英文復興カレンダーの作成と英語での口頭発表というゴールを示し、ゴール達成までの指導計画の立案と実施を研修者に求めた。

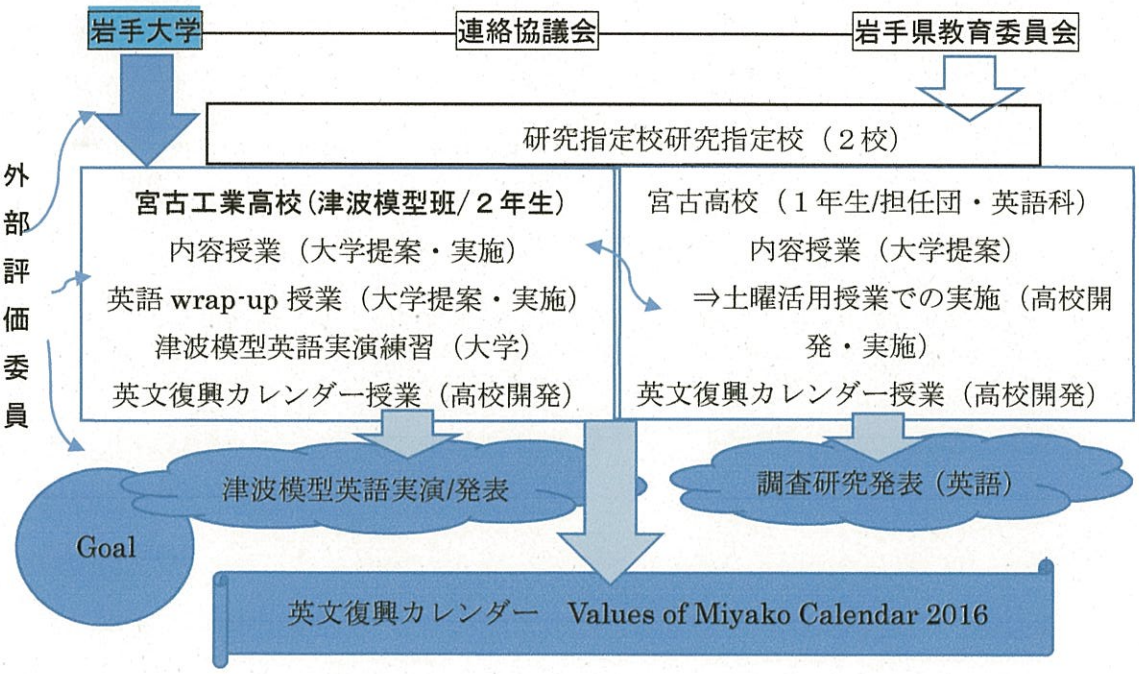
○教員養成課程の学生・院生・留学生の参加：岩手大学教育学部教員養成課程で教師を目指して学んでいる学生、教育学研究科でより実践力を高めようとしている院生・教員研修留学生も本事業の研修対象者として、提案授業に参加を求めた。このことにより大規模な内容授業の構成が可能となり、また、現職の教員が、自ら授業を構想する研修に加えて、提案授業を参観する機会を得ることができるようにした。

３ 開発組織

岩手大学教育学部英語教育科を主体として、連携先の岩手県教育委員会（高校教育課）との間に連絡協議会を設け、連絡を取り合いながら運営にあたった。連携先が研究指定校の指定を中心に、主催者が、提案授業・研修の開発及び予算執行・人員配置等を中心に、研究指定校での実践的研修を実施した。宮古市の教育関係者３名に外部評価を依頼し、研修会・実践授業の参観をもとに評価を得た。相互の関係は組織図に示すとおりである。

２つの研究指定校は、英文復興カレンダーの作成というゴールを共有する他、それぞれのゴールも設定された。宮古工業高校は課題研究科目における「津波模型班」の英語での実演、宮古高校は１年生全員を対象とした一連の「Discover-Our-Town Project による合科型内容中心英語教育の実践的モデル開発」講座での英語による研究発表である。したがって、宮古工業高校は津波模型班担当の工業科教員と英語科教員が担当し、宮古高校は１年担任団と１年英語科教員が担当することとなった。両校の ALT は同一人物で、本事業による研修会のすべてに参加した。岩手大学と各研究指定校との打合せに加えて、二つの研究指定校の担当者（英語科・工業科）と岩手大学との打合せも実施して実践的研修を進めた。

＜組織図と実施内容＞



II　開発の実際とその成果

工業科と普通科という二つの研究指定校の通常の英語授業は異なったものである。さらに、人数が異なる。工業科が、津波模型班は１５名であり、英文復興カレンダー作成にあたった２年生は約７５名であるのに対し、普通科の宮古高校は１学年２２１名という大人数であり、本事業において特別に立案した授業をどのように全生徒に浸透させるか大きな課題となる。

少人数の宮古工業高校では、内容授業と英語ラップアップ授業の提案を岩手大学から提案し、岩手大学の教員と教員養成課程の学生・院生・留学生が提案授業にあたるタイプの「提案授業による研修」とした。小規模校での研修モデルとなる。宮古高校からは、第１学年の「土曜活用授業」を当てたいという提案がなされ、１学年担当英語科教員を中心に１学年担任団全員で１年間を通して実施する「土曜活用授業」の中に本事業による授業を組み込むこととなった。複数教員のローテーションを用いた「モザイク授業」の工夫や生徒のグループ活動などを取り入れた、複雑ではあるが個々の生徒の充実度を高める、大規模校における「プロジェクト型研修」モデルが実施された。

また、英文復興カレンダー作成という具体的作品をゴールとすると、両校それぞれで授業計画が立案実施され、完成した生徒作品を両校教員と岩手大学との協働作業でカレンダーという一つの作品に仕上げた。「ゴール設定型研修」である。

本事業は、このような複雑な構造をもっているので、３つの研修タイプに分けて説明する。

A「提案授業による研修」：①宮古工業高校津波模型班を対象とした提案授業と英語実演指導（小規模校モデル）
②宮古高校におけるタイについてのモザイク授業（大規模校モデル）

B「プロジェクト型研修」：宮古高校における「Discover-Our-Town Project による合科型内容中心英語教育の実践的研修」モデル開発講座（大規模校モデル）

C「ゴール設定型研修」：英文復興カレンダー作成に向けての英語授業計画とモデル文
①　宮古工業高校の例
②　宮古高校の例

１ A「提案授業による研修」

①　宮古工業高校津波模型班を対象とした提案授業と英語実演指導

○研修のねらい：宮古工業高校の場合：津波模型班は、東日本大震災前から地域の模型を作成しそこに津波を発生させる実演による津波防災の啓蒙活動を行っており、防災甲子園等で数々の賞を受賞している。震災後は海外からの視察も受けるようになり、通訳を通してではなく高校生が英語で実演する機会となっている。当初、英語の原稿の暗記に頼っていたので、より自然に英語でのプレゼンテーションを行う暗記以外の方法を示すこと

をねらいとした。自然に英語で実演することは、相手に分かりやすいと同時に実演する側の工業高校生が伝える喜びと自信を感じることを期待した。

内容授業とその英語でラップアップの授業提案においては、東日本震災の経験から得られている新たな教訓や知見を専門家が提供し、今後の活動の質の向上と活動に高校生がさらに意義を感じる指導を行うこと、英語授業とつないで専門的内容を高校生に理解可能な形にしてラップアップする活動・教材作成を示すことを目的とした。

英文復興カレンダー作成というゴールがある。このゴールに向けて、英作文の指導が行われるが、英作文の訂正については有効な指導方法が模索されている。そこで、教員養成課程の学生・教員研修留学生を指導し、二つの提案授業を構想・実施した。ねらいは、教師による英作文の訂正が必ずしも有効に機能していないことを知らせること、従来とは異なる方法を知らせることである。

1）災害に関する内容授業

☆第1回:「東日本大震災における防潮堤の実際、震災時の被害の状況とその後の復旧」

講師　松林由里子先生（岩手大学工学部）

日程　2015年7月17日

対象　宮古工業高校津波模型班生徒（1～3年）15名、宮古商業高校生徒4名、宮古工業高校教員8名、宮古市内教員6名、岩手大学教員養成課程学生・教員研修留学生9名

内容　宮古市内の防潮堤を中心に東日本大震災での被害状況とどのような力が防潮堤に働いたかの説明、現在の国の防潮堤建設方針等をパワーポイントを用いて説明

実施形態　講義、質問

時間　2時間

☆第2回：「To get water at the time of a disaster ～災害時に水を得るには」

講師　大河原清先生（岩手大学教育学部）

日程　2015年8月21日

対象　宮古工業高校津波模型班生徒（1～3年）15名、宮古工業高校教員8名、宮古市内教員5名、岩手大学教員養成課程学生・教員研修留学生9名

内容　災害時に最も困ったことの一つとして「水の確保」を取り上げ、地球の水の循環の説明、水道水の製造過程等をパワーポイントで説明した後、ペットボトルで蒸留水生成実験を行った。また、震災後宮古工業高校で作られた「カマドベンチ」を使って水を沸騰させ蒸留水を生成する実験を実験室に移動して行い、飲料水を確保することがいかに困難でありかつ重要であるかを実感をもって理解する内容。

＊PP は HP に掲載

実施形態　講義、実験（２件）、質問

時間　２時間

２）英語ラップアップ授業

☆第１回内容授業に対して

講師　山崎友子先生（岩手大学教育学部）、岩手大学学生・教員研修留学生

日程・対象　第１回内容授業に同じ

内容　“Wow, a dike is not built for the case when a tsunami flows over it!”

防潮堤に関する語彙を crash game / karuta / dialog などによって学習

防潮堤の構造を英語で説明するのに magic box を使用する方法を紹介

実施形態　演習、グループ学習

時間　９０分

＊Lesson Plan は HP に掲載

☆第２回内容授業に対して

講師　山崎友子先生（岩手大学教育学部）、岩手大学学生・教員研修留学生

日程・対象　第２回内容授業に同じ

内容　“Wow, we can make drinking water!”

飲料水の作り方の手順を karuta /matching game などによって学習

防潮堤の構造を英語で説明する を使用する方法を紹介

実施形態　演習、グループ学習

時間　９０分

＊Lesson Plan は HP に掲載

☆Feedback Session 1

講師　Edwin Portillo （教員研修留学生）

日程　2015 年 11 月 20 日

内容　英文復興カレンダーの英文添削の方法として Communicative Language Teaching の手法を用いた指導方法を提案。PP の使用による Input と Quiz / line-up game / bell and hat の活用

実施形態　演習（コミュニケーション活動）

時間　５０分

自己評価　下記項目の評価欄を指導案の中に入れた。

SELF-EVALUATION: ・Did I manage the time successfully?

・Did I complete the lesson?

□ Did I speak less than my student?
□ Was the environment friendly?
□ Did my students participate?
□ Did my students make use of English (or tried at least)?

＊Lesson Plan は HP に掲載

☆Feedback Session 2

講師　工藤香帆、松田佳子（岩手大学教員養成課程学生）

日程　2015 年 11 月 20 日

内容　英文復興カレンダーの英文添削の方法として 英文のスタイルの特色に焦点を当てた授業を提案。日本語モードの例文と英語モードの例文を提示 / worksheet により生徒自身が英語モードの英文に修正。

実施形態　講義、演習

時間　５０分

☆津波模型班英語実演練習

講師：北村ちひろ（岩手大学教員養成課程学生）他

Goal: Enable the high school students to make an English demonstration more naturally.

方法：パワーポイントスライド（HP に掲載）

② 宮古高校におけるタイについてのモザイク授業（報告　James M. Hall）

講師　山崎憲治先生（元岩手大学教授）、岩手大学教員養成課程学生・院生、留学生

日程　2015 年 10 月 10 日

内容　タイの教員との交流授業の事前学習。221 名の生徒に対して、Reading Section とタイでの英語教育実習を体験した学生とタイからの留学生による６つのテーマ別のワークショップからなるモザイク学習を提案。Reading text はタイの洪水について宮古高校英語科教員と Hall が意見交換をしながら作成。

実施形態・時間・テクスト作成・評価については下記のとおりである。

Report on Thailand Day, October 10, 2015 (James M Hall)

On October 10, 2015, a total of 13 Iwate University students together with Professor Kenji Yamazaki gave mini lectures about an aspect of Thai society and culture at Miyako High School. The mini lectures were conducted in the following way. First,

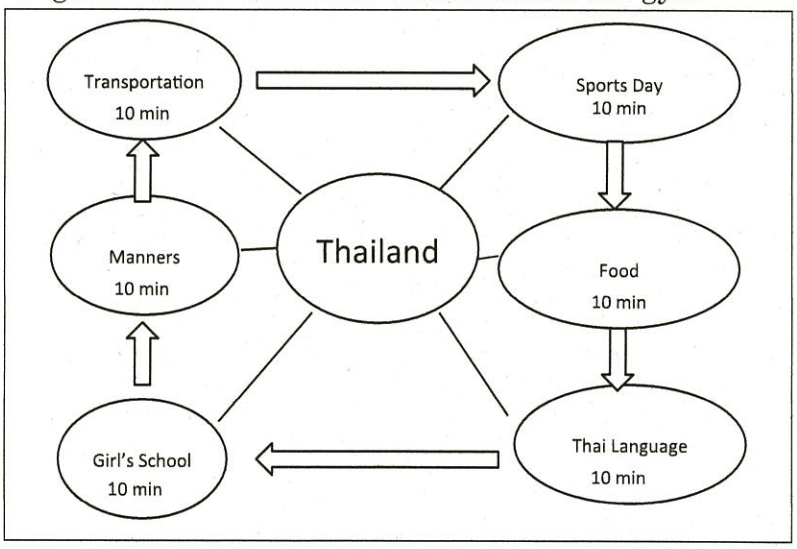
three of the six homerooms did a reading class where the learned about Bangkok's history with water (The Founding of Bangkok), the 2011 flood in Thailand, and agriculture and flooding in Thailand. The latter was taught by Professor Kenji Yamazaki. There were two university students assigned to each homeroom. In the span of 60 minutes, the high school students had three mini-classes. Table 1 shows the rotation of mini-classes

Table 1. Rotation of mini-classes

Time (In min.)	Homeroom 1	Homeroom 2	Homeroom 3
1~20	Agriculture and Flooding	Part 1: Founding of Bangkok	Part 1: Founding of Bangkok
21~40	Part 1: Founding of Bangkok	Agriculture and Flooding	Part 2: 2011 flood in Bangkok
41~60	Part 2: 2011 flood in Bangkok	Part 2: 2011 flood in Bangkok	Agriculture and Flooding

While homerooms 1 to 3 were having the mini-classes, homerooms 4 to 6 were listening to mini-lectures in the gym. The topics were transportation, manners, girls' schools, Sports Day, food, and the Thai language. One university student taught about one topic, except for the Thai Language presentation which consisted of two exchange students from Thailand and a Japanese university student.

Figure 1. Mini llectures conducted in the gym

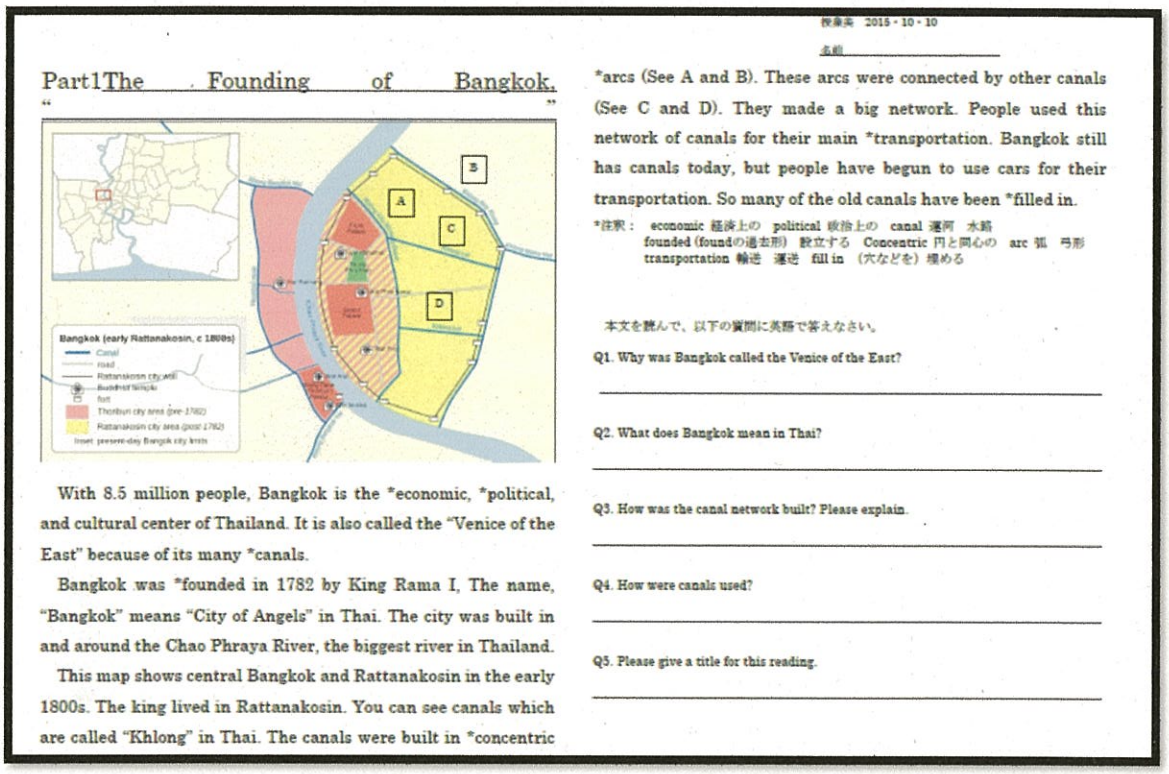


The high school students rotated every 10 minutes and listened to a total of 6 mini-lectures in 60 minutes. After the first hour, homerooms 4 to 6 went to their classrooms for the mini-classes and homerooms 1 to 3 went to the gym for the mini-lectures.

For the 10-minute mini-lectures, the content was created by the university students. They all had experience visiting Thailand and presented about an aspect of the country that interested them. The presentations were interesting and provided the high school

students with a good example on how to give a presentation.

For the mini-classes on the founding of Bangkok and the 2011 flood, the text was written by James Hall and Akemi Kubo and then simplified by the Iwate University students. The worksheet for Part I, *the Founding of Bangkok*, is shown below. The Iwate University students created the comprehension questions and designed reading classes with pre-, during, and post reading stages.



Part1The Founding of Bangkok.

With 8.5 million people, Bangkok is the *economic, *political, and cultural center of Thailand. It is also called the "Venice of the East" because of its many *canals.

Bangkok was *founded in 1782 by King Rama I, The name, "Bangkok" means "City of Angels" in Thai. The city was built in and around the Chao Phraya River, the biggest river in Thailand.

This map shows central Bangkok and Rattanakosin in the early 1800s. The king lived in Rattanakosin. You can see canals which are called "Khlong" in Thai. The canals were built in *concentric *arcs (See A and B). These arcs were connected by other canals (See C and D). They made a big network. People used this network of canals for their main *transportation. Bangkok still has canals today, but people have begun to use cars for their transportation. So many of the old canals have been *filled in.

*注釈： economic 経済上の political 政治上の canal 運河 水路 founded (foundの過去形) 設立する Concentric 円と同心の arc 弧 弓形 transportation 輸送 運送 fill in (穴などを) 埋める

本文を読んで、以下の質問に英語で答えなさい。

Q1. Why was Bangkok called the Venice of the East?

Q2. What does Bangkok mean in Thai?

Q3. How was the canal network built? Please explain.

Q4. How were canals used?

Q5. Please give a title for this reading.

Overall, the reading lesson was a good experience for both the high school and university students. The high school students were able to experience reading authentic English for a purpose, understanding Bangkok's relationship with water. This provides practice for the essential skill of being able to read an authentic text quickly without any translation aides and understand the meaning.

The university students were able to experience a content-based lesson: designing their own materials and doing a reading class not for the purpose of translation, but rather to help students learn about an aspect of Bangkok. Many of these students planned to teach in Thailand in the English Department's two-week overseas teaching practicum called the Puean Program.

2　B「プロジェクト型研修」：宮古高校における「Discover-Our-Town Project による合科型内容中心英語教育の実践的研修」モデル開発講座（大規模

校モデル）

宮古高校第１学年「土曜活用授業」に組み込み、下記の日程で実施した。宮古高校第１学年担任団により作成された年間計画は別紙として添付。それぞれの実施要項は本プロジェクトの HP に掲載。221 名の生徒と学年担当の教員・岩手大学学生の役割と配置、企画書の作成は、英語科教員が行い、後半では、宮古高校独自に卒業生や市役所職員等々をゲストに招いての講座が企画されていった。学年担任団が取組むことにより、異なる教科の教員が互いの知識・経験・実践力を学びあう機会が作られた。

☆第１回　6 月 27 日　Values of Miyako：Values の再発見と発信

ゲストスピーカー　田畑ヨシさん、東キヌさん、高橋恵美子さん（紙芝居「つなみ」作者、講師）　成井和子先生（聖心インターナショナルスクール）

☆第２回　7 月 18 日　"Values of Miyako：災害をとおして見えてくる宮古の Values ～若い世代に伝えたいこと"

ゲストスピーカー　①荒谷アイ先生・荒谷栄子先生（母　昭和大津波で孤児に。娘　元田老第三小学校長）

②假屋雄一郎先生（宮古市職員・郷土史家）

③山根幸伸先生（水産庁長官任命　お魚かたりべ）

④金澤純二先生・金澤洋子先生（元消防士ご夫妻）

⑤山崎正幸先生（宮古市職員・防災士・宮古高校ＯＢ）

⑥James M. Hall 先生（岩手大学准教授）

⑦山崎憲治先生（災害研究者）

☆第３回　9 月 26 日　"Values of Miyako: 外国人から見た被災地、岩手"

ゲストスピーカー Amya Miller 先生（陸前高田市役所　特別顧問）

☆第４回　10 月 10 日　"Values of Miyako: タイの Vlaues と　Problems を学ぶ"

講師　Reading Section: Manai Takasugi, Sakura Iwadate, Shota Sugawara, Ayano Tanaka, Hajime Yokoyama, 山崎憲治先生

Presentation Section: (1) Shunsei Tanaka　(2) Hinako Kinnno　(3) Domon Panitan, Thanaporn Sukhuprakarn, Takahiro Kudo　(4) Fumie Nishidate　(5) Kaho Kudo　(6) Sun Jie

☆第５回　10 月 24 日　"Values of Miyako: 宮古 Values Poster Session ～英語で自分達の故郷を説明してみよう"

ゲスト　タイ中等学校教員４名、岩手大学教員２名、岩手大学学生・留学生他

☆第６回　11 月 28 日　"Values of Miyako: Our Hometown in the Future ～高校生が考える未来の故郷"

宮古市の現状を知るミニレクチャーと講師

(1) 中心市街地津波復興拠点整備事業について―岩間健先生（宮古市企画部復興推進課

市街地施設推進室　室長）

(2) 宮古市の復興に向けた取り組みについて―加藤敏也先生（宮古市企画部復興推進課復興推進担当主事）

(3) 地域に根ざしたＮＰＯの取り組みについて―早川輝先生（NPO 法人　みやっこベース　事務局長）

(4) 地域の防災を支える立場から―前川望先生（宮古市消防署　消防士/宮古高校ＯＢ）

☆第７回　12 月 12 日　GTEC 受験

☆第８回　2 月 13 日　"Values of Miyako: Our Hometown in the Future Presentation ～高校生の提言　プレ発表会"

☆第９回　2 月 20 日　"Values of Miyako:　Our Hometown in the Future Presentation ～高校生の提言　発表会"

ゲスト　ポスターセッション参加の先生がた、保護者、市教育委員会関係者、地域の方、他校英語科教諭、岩手大学教員、岩手大学学生・留学生・教員研修留学生他

最終発表会の第一部パワーポイントによる６グループの発表は、紙媒体による報告書にその一部を掲載、全スライドは HP に掲載している。生徒の相互評価、教員・ゲストによる評価のために「ルーブリック」「評価表」が作成された。

３　C「ゴール設定型研修」：英文復興カレンダー作成に向けての英語授業計画とモデル文

生徒への指導者は別々に行われた。宮古工業高校の作品は評価表により高校生及び岩手大学学生による評価がなされ、岩手大学教員養成課程の学生は「評価表」の作り方を学ぶ機会となった。宮古高校の作品は文化祭で発表された。どちらも、モデル文を示した後、生徒の実態に応じた必要時間が設定されている。どちらの学校でも “Show and Tell” が活用されている。

① 宮古工業高校の例　（宮古工業高校英語科, Benjamin Pedersen）（＊全文は HP に掲載）

☆第１回授業（2 時間）7 月 2 日・3 日実施

FUKKO Calendar. To learn how to explain a place/person around them with data (trivia) and a　photo: Since this will be the first step to making the calendar, prepare 4 types of models of storytelling (4 pictures) with 5 sentences each. Examples should be famous places/people. Show and Tell style.

- Show models and give a task to make one explanation sheet of a place or person. Students may use their phones to search for data or photos.
- This task will be continued into the next class.

The goal of the lesson was for the students to create a brief “Show and Tell” of a

person or of a place anywhere in the world. After a warm up, we provided 4 examples and modeled the sentence structure and organization of a "Show and Tell" presentation.

＊モデルは紙媒体の報告書及び HP に掲載

② 宮古高校の例

Values of Miyako Calendar 作成までの宮古高校１学年での授業実施について

岩手県立宮古高等学校　一学年英語科　久保朱美

【１】 英文カレンダー作成に至るまでの全体の流れ

【2】	実施時期	テーマ	活動内容等	使用教材
1	６月第１週～第２週	Introducing my friends	-Pair work -Interview	Warming up Worksheet #1
2	６月第３週	Introducing my friends (2)	-Speaking test	Worksheet #2 Rubric
3	６月 24 日・25 日	Story reading "Fire in the Haystack"	-Understand the story -Learn vocabulary -Put sentences in order	Worksheet #3
4	６月 27 日	第１回　Values of Miyako：Values の再発見と発信		
5	７月第２週	Show and Tell (1)	-Understand the facts to explain -Understand how to explain clearly	Worksheet #4 Worksheet #5
6	７月第３週	Show and Tell (2)	-Practice explanation -Understand the aim of the assignment	Worksheet #5 Worksheet #4*
7	夏休み課題	Photo taking Writing Essay		英語科通信 20150723/0807
8	８月第３週～第４週	Photo Essay Making	-Rewrite and revise the photo essay -Making photo essay using PP	PP example 英語科通信 201508018
9	８月 30 日	文化祭展示（一学年企画:　Values of Miyako)		
10	９月第１週～第２週	Show and Tell (3) Presentation	-Show & tell in class -Listen to each other & evaluate	Photo Essay Rubric* Evaluation card*

*印のあるものは HP に掲載

【２】使用教材

① Departure English Expression Ⅰ　(大修館)

② Getting Ready for SPEECH (Published by Language Solutions Inc.)

③ 自主教材

(1) Fire in the Haystacks

参考：弘前大学理工学部地球環境学科　地圏環境学講座　佐藤研究室ホームページ　稲むらの火　紙芝居

(2) Introducing your friends

参考：使用教材① Lesson 2 My Friends　及び　使用教材② Unit 2 Introduction speeches

(3) Show and tell

参考：使用教材② Unit 6 Storytelling ～Show and Tell

(4) パワーポイントを使ったカレンダーモデル

(5) ルーブリック評価シート

【３】　共同作業（どことどのような共同作業か）

（１）　土曜活用授業

宮古高校では年間１２回実施。例年学年主導で内容等を計画。今年度はキャリア教育やアクティブラーニングのスタイルを取り入れた内容を企画。総合的な学習にもつながるように考慮した。

（２）　情報

コンピュータの基本操作や著作権の授業実施後にパワーポイントを利用した英語発表を視野に入れた指導をお願いしたり、英語科教員が授業に入って一緒に行ったりした。

【4】留意事項

① 12 回の土曜活用授業の最終回をまとめの発表会とし、そのゴールに向けた内容になるように土曜活用授業の流れを年度初めに計画した。

② 英文カレンダー作成は当初から決まっていた事項だったため、夏休みの課題を英文フォトエッセイとし、生徒自身に写真を撮らせ、データを学校の指定アドレスに送らせるという方法をとりスムーズに情報授業に入れるようにした。

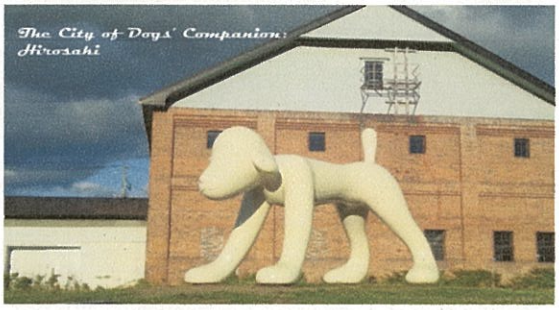
③ 入学時、英語の学力に不安が感じられる生徒が少なからずいる学年であったため、土曜活用の授業も徐々に英語が入っていくように工夫した。

④ 震災から時がたっていても未だにストレスを感じている生徒にも配慮し、震災に直接目を向けるのではなく、地域の復興や将来に目を向けさせ、さらに自分達の進路についても考える機会につなぐようにした。

⑤ 英語を話す、聞くということに抵抗をなくすため、授業の中で少しずつ簡単なスピーチなどを踏まえることやスピーチ発表にはルーブリックを用いて互いに評価し合い、聞く姿勢も身につくように配慮した。

⑥ 皆に親しみやすい名称を付けて、英語授業やホームルーム担任（英語教科担当ではない）が何について話しているのか、わかりやすいように工夫した。

【パワーポイントを使用したカレンダーモデル】



＊奈良美智の作品がある「犬と遊べる」街中の公園。高校のときによく通った道がおしゃれになっていた。犬に優しい街だったんだ。

I went to a high school in Hirosaki, Aomori.

The city is famous for its cherry blossoms and summer festival called Neputa. Many people visit the city all year around.

It also has many artistic buildings and places. Hirosaki Ken stands in Yoshino-cho park. It was made by Yoshitomo Nara, the famous artist who was born in Hirosaki and went to my high school.

I love Hirosaki and Hirosaki Ken. You should visit Hirosaki and meet him. He is so cute.

＊各回の指導案はHPに掲載

○実施上の留意事項

1) 日程調整：土曜であっても部活動等で研修会に参加できない教師が多い。長期的な計画が必要である。

2) 教師のface：教師は自身の経験にこだわりを持つことが多い。そのfaceを傷つけず、新たな経験を積む方法を選択することが望ましい。

3) 研修校のつなぎ方：「連絡協議会」という正式な仕組み以外に、研修校の教員の行き来があるとより有効である。本プロジェクトでは、２つの研修校のALTが同一人物であり、プロジェクトを深く理解して実践計画を推進する力となった。

4) 外部委託：アンケートの集計等、大規模校では迅速に行うことが困難である。外部委託も一案とするとよい。

○研修の評価方法、評価結果

1) 外部評価者３名による評価

東日本大震災の被災体験者であり、震災前から津波防災に尽力され、震災後の学校の復興に関わられた３名の先生方に依頼して外部評価をいただいた。評価の全文を紙媒体の報告書と HP に記載した。

荒谷栄子先生（宮古市教育委員、震災時宮古市立田老第三小中学校校長）には、すべての研修会を参観していただき、高校生が真剣に積極的に学習に参加する変容が見られる成果をあげた研修プロジェクトであったことを高く評価していただいた。中屋定基先生（元宮古市教育長）にもほとんどの研修会を参観していただき、「災害」をテーマとする研修として意義があることを述べていただいた。震災時田老第一中学校の校長であった佐々木力也先生は、復興を支える人材育成という観点からの評価と英語の専門家としてアクティブ・ラーニングの導入に向けての研修としての有用性を評価していただいた。

2) 研修の場となった二つの高校の最終ゴールである「英文復興カレンダー」「研究発表」「津波模型班の英語実演」の評価

「英文復興カレンダー」 “Values of Miyako Calendar 2016” を別途送付

「研究発表」「津波模型班の英語実演」は HP に掲載

研修参加者のレポートにより評価の一端を把握した。

○各研修において、研究指定校の教員は実践的に研修し、大学教員養成課程の学生・留学生・教員研修留学生は、大学で指導を受けて授業を構成し、実際に授業を行い、計画の有効性を振返るとともに指導技術の向上を図った。また、ゲストとして高校生に接し、生徒理解を深めることができた。他校の教員は、実践を観察することにより、新しい指導の進め方を学び、アンケートに回答するという形で振返りを行った。また、二つの研究指定校の教員は、相互に行き来して、他校の実践を見学する機会により、より多様な指導方法、生徒理解を深めることが可能となった。

○研修実施上の課題

1) 語彙テスト：語彙テストを作成し、研修前後の高校生の災害に関する英語語彙の変容を測ることを計画実施した。しかし、ポストテストの実施時期が不適切であったこと、予め研修授業の内容が決定していなかったため高校生が学んだ語彙と一致していないという問題があり、データとして妥当なものとならなかった。今回の授業を振返り、語彙テストを修正する必要がある。

2) 日程調整：大学が高校を研究指定校とする場合、それぞれの学年暦が異なるため、日程の調整が必要になる。無理のない日程を優先し、研修内容を修正する必要もある。

Ⅲ 連携による研修についての考察

（連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点、今後の課題等）

まず、本事業は連携によって実現したことを挙げたい。片方だけでは実現できない事業である。大学が新しい指導法について学校現場で研修を行おうとすると、学校現場には教育課程の実施に忙しく研修を入れるゆとりが少ないという実情があり、大学で実施しようとすると、高校の教員が校務を免除されて研修参加するのには限界があり、実現できても単発的な研修しかできないという実情がある。一方、教育委員会はすでに数多くの研修会を開催している。新しいタイプの研修の開発が外部で行われるのは歓迎したいものであるが、学校現場のニーズを考え、実際的なものとするために外部任せにできないという点も考慮しなければならない。このような条件の中で、新しい有効な方法を開発していくには、大学側の新しい手法の提案と実施、教育委員会による大学と学校現場の接合という連携が欠かせない。

役割分担がポイントとなる。教育委員会の日常業務に加えての連携事業であるので、主催側がより中心的な役割を分担することが重要である。ただし、方向性への理解を共有することも重要であり、事業全体の趣旨説明をしっかりと行うこと、事業の意義が理解されていることが要点である。

連携により得られる利点として、長期にわたる「プロジェクト型研修」が可能であること、大学からの「提案授業による研修」が可能であること、学生も含めて多様な参加者があり多様な学びが可能である。教職経験の長い教師は、新しい指導方法を直接的に教授されるよりも若い教員の指導を観察して振返ること、あるいは若い教員への指導を通して学ぶことも多い。また、若い学生は新しい指導方法を用いることに躊躇しないので、教職経験の長い教員に新しい指導方法を紹介する有効な方法ともなる。連携による利点として、教育委員会の予算以外で運営することができる点も挙げることができる。

今後の課題として、教員は研修に継続して参加することが極めて困難であることを挙げたい。この問題の解決方法の一つとして今回の「実践的研修」が考えられると思われるが、その成果を広げる方策が必要である。今回本事業では、全国の教育委員会に参考にしていただくための本報告書の他に、HP を作成した。また、岩手県の高校用に紙媒体での報告書も作成した。参考になれば幸いである。

Ⅳ その他

[キーワード]

災害、合科型、内容中心英語教育、実践的研修、プロジェクト型研修、ゴール設定型研修、提案授業による研修

[人数規模]　B　と　C

補足事項　研究指定校が２校であった。

[研修日数(回数)]　C　と　D

補足事項　研究指定校が２校であった。

英文復興カレンダー作成のための授業と打合せは別途実施した。

[本事業 website (HP)]

http://iwateuniversity-ccblt.neted.com.au/

【問い合わせ先】

国立大学法人　岩手大学

教育学部英語教育科　山崎友子

〒０２０－８５５０

岩手県盛岡市上田３－１８－３３

TEL　０１９－６２１－６６１７

岩手県教育委員会事務局　学校教育室

高校教育課長　岩井昭